

知られざる東北の戦災—— 釜石艦砲射撃。その記録。

アジア・太平洋戦争終戦まぎわ。岩手県釜石市は連合国軍による艦砲射撃に二度、襲われた。

最初は1945年7月14日。二度目は約1か月後の8月9日。

三度の艦砲射撃によって、軍需工場でもあった釜石製鉄所ばかりでなく、市街地ほぼ全域が焦土と化した。

しかし、最初の艦砲射撃に従事した米軍の兵士によれば、最初の攻撃で戦果は充分だったという。

再度の攻撃は必要なかったはずなのだ。

なぜ、二度めの艦砲射撃は行われたのか？

なぜ、必要のない攻撃で人々の命が失われたのか？

作中では、広島・長崎の原爆投下にも関連した、残酷な真実が明らかになる。

——釜石市には二度の艦砲射撃と戦争の悲惨さを語り継ぐようとしている人々がいる。

だが、その前には様々な苦難が立ちだかっていた。

敗戦から80年経った記憶の風化。艦砲射撃を経験した人々の高齢化。そして——東日本大震災。

これは歴史の忘却を防ぎ、同じ過ちを繰り返さないため、過去と現在を未来へと継承していこうとしている戦争の体験者たち。

そして、自身で東日本大震災を経験し、彼らの想いを継承しようとする新しい世代を追った記録。

今、私たちは、
あの時に犠牲となった人たちが望んだ
未来を歩めているのだろうか——

廃墟と化した鉄の町 釜石艦砲射撃の記録

ヒロシマ、ナガサキだけではない。東北で起こった敗戦間際の悲劇——
戦争の語り部たちに立ちはだかる記憶の風化、高齢化、そして……3.11。

<2つの【戦争の記憶】の継承>

この作品は、2つの意味で【戦争の記憶】の継承に大切な役割を果たしている。まず、作品に登場する釜石艦砲射撃の体験者の語りそのものが、実に貴重な歴史の証言である。作品そのものが【戦争の記憶】を継承するための生きた資料館になっている。そしてさらに、戦争体験世代から【戦争の記憶】を継承しようとする若者の取組みをあたため眼差しで見つめ、非体験・孫世代が【戦争の記憶】の確かな継承者になれることを明らかにしている。

山田 朗
(明治大学・歴史研究者)

玉音放送の6日前、長崎に原爆が投下された日。鉄の町・釜石は艦砲射撃と空爆で廃墟になった。死者は千人とも言われるが正確な数は不明だ。映画はこの悲劇がなぜ起きたのか、その謎に迫っていく。釜石はアジア・太平洋戦争を支える町だった。証言のなんと生々しいことか。ダダダダーン、ドロドロロン、はらわたに響くような音。いまのウクライナへの侵略を連想する。不発弾の危険は77年経った今も去ってはいない。津波の被害にも負けず、平和を願う釜石の人たちの熱い願い。長期の取材の過程で、語ってくださった方々の中には完成を待たずに世を去った方もおられる。若き映画人のまっすぐな執念に心揺さぶられる。

永田 浩三
(ジャーナリスト・武蔵大学教授)

この映画を観るまで、釜石艦砲射撃の悲劇を知らなかった。知っていたとしても、特に気に留めていなかっただろう。映画は、物語がはじまる場所と時間を刻みつける。体験者たちは、忘却に抗い過去と向き合う。無数に漂白する戦争の記憶によって、僕らの心もざわついた。いつの世も戦争の犠牲者は、名もなき普通の人のびとなのだ。はたして今の僕たちは、あの時に犠牲となった人たちが望んだ未来を歩めているのだろうか。

今井 友樹
(ドキュメンタリー映画監督)

大学・専門学校内での授業や、図書館での個人視聴、個人貸し出し、図書館内での上映に使用できます。

図書館内上映権付

(図書館外での上映はできませんのでご注意ください。)

20,000円＋税

企画・製作・監督／都島伸也
企画・製作・撮影・編集・ナレーター／都島拓也
監音／若林大介
現場録音／藤崎仁志 高橋一美 千葉洋喜
ドローン撮影／AIRHUNCHI
タイトルデザイン／堤 岳彦 (ebc)
CG制作／徳田芽里沙 (TZ Graphic works)
劇中イラスト／高橋明音
予告編制作／岩永知佳子
宣材制作／高橋明音 川杉次郎
製作・配給／ロングラン・映像メディア事業部
2023年／86分／16:9／日本／ドキュメンタリー

■公式サイト
http://longrun.main.jp/footsteps_war/index.html

【配給・製造元】有限会社ロングラン・映像メディア事業部

〒024-0056 岩手県北上市鬼柳町都鳥38-1

TEL/FAX0197-67-0714

【販売・お問合せ先】株式会社BBB

〒141-0021 東京都品川区上大崎三丁目1番1号

目黒セントラルスクエア8階

TEL:03-5793-5820 FAX:03-5449-0861

